

とびラジオ～とびラーが語るイサム・ノグチ

(曲入る)

【OP】

みなさん、こんにちは。「とびラジオ」パーソナリティー、とびラーのトヨシです。
只今、東京都美術館では、特別展「イサム・ノグチ 発見の道」を開催しております。みなさんは、もう行かれましたか？イサム・ノグチの魅力を感じられる展覧会でしたね。
まだ行かれていない方、このとびラジオを聞いた後、是非東京都美術館に足を運んでください

ね。
ここからは「イサム・ノグチ 発見の道」のチラシをご用意の上、「とびラジオ とびラーが語るイサム・ノグチ」をお楽しみください。

これからお届けするのは、私たち とびラーが、イサム・ノグチ展の作品をじっくりと見て、お互いに気づいたことや感じたことを言葉にする中から生まれた、2つの会話劇と1つのひとり語りです。

みなさんにさらに自由に作品を楽しんでいただくきっかけになれば嬉しく思います。

(曲入る)

【MC①】

まず最初は、お手元のチラシの作品番号③。タイトルは《ヴォイド》です。
展示室で作品を前に母と娘が語り合っていますよ。どんな話をしているのでしょうか。そっと耳を傾けてください。

【《ヴォイド》】

娘 「あーあ、留学もなくなっちゃってつまらない夏だなあ～。今日も、なんでお母さんと東京都美術館来てるんだろ…。(退屈そうに)」

母 「あら？まだここにいたの！（驚きながら）ねえ、この色とツヤ、チョコレートみたいじゃない？(無邪気に)」

娘 「ちょっとお母さん！やめてよ、チョコレートだなんて…(呆れながら)あ、でも言われてみれば、表面の質感がチョコレートみたいにツヤツヤしているね。(発見した様子で)」

母 「でしょ？(得意げに)これなんて作品なの？」

娘 「名前は…《ヴォイド》だって。ヴォイドって言ったら、『空虚』、パソコン用語では『空(カラ)』っていう意味もあるんだよ！」

母 「へえ～よく知ってるわねえ。（感心した様子で）」

娘 「空虚とか空（カラ）って、この作品の真ん中の空間のことかなあ？（不思議そうに）」

母 「子どもなら間違いなく飛び込んでるわね。大人もしゃがんだらくぐれそうじゃない？（ヒソヒソ声で）」

娘 「もう！ホントにくぐらないでよね。」

母 「冗談よ～ あら？あっちゃよっこっち、横に来てみて！（驚きながら）このカタチ、さっきの角度からだ台形に見えたけど、横から見ると三角形じゃない？」

娘 「あ～本当だ～！（驚いた様子で）ぐるっと回って見ると、三角形に見えるところがある！この作品、単純に金属のパイプみたいなものを台形にただけだと思ったけど、よく見ると、ねじられて、動いてるみたい！」

母 「ねじられて動いてる？それ、どこのこと？（不思議そうに）」

娘 「あ、ほら、この床に接している底辺を見て！ひらがなの『へ』の字みたいに曲がってるでしょ？台形の上下の辺も、真横から見ると平行じゃなくってずれてて…」

母 「あらホント！見る角度によって、形が変わって見えるのね。面白いわね～。
横から見て、黒いふちをなぞると、数字の8の字みたいに交差して見える！（楽しそうに）」

娘 「それに、こうやってじーっと見つめると、中央の空間に吸い込まれそうになる。不思議な感覚。（落ち着いた様子で）」

母 「そうね、一緒に見てたら、なんだか作品からエネルギーを感じてきたわ！」

娘 「え、エネルギー？！（驚きながら）うーん、あ！確かに、ぽっかり空いた空間を見つめていたはずなのに、どんどん黒いふちの部分の存在感が高まってくるね。作品全体がねじれたり、うねったりしてるから、生命を感じる！（楽しそうに）」

母 「あら？あなた、この展示を見る前より、表情明るくなったんじゃない？（嬉しそうに）」

娘 「うーん、そうかなあ。（恥ずかしそうに）まあでも、いつか留学してニューヨークのイサム・ノグチの美術館にも行ってみたいかなって思った！（明るい声で）」

【ジングル】

(曲入る)

【MC②】

では、次の作品です。お手元のチラシの作品番号⑥、タイトルは《あかり》です。
《あかり》のインスタレーションの下でくりひろげられる、二人の女性の会話劇です。

【《あかり》】

女性A 「(展示室の広さに驚いた感じで) わー、広いわねーみてみて、展示室の真ん中に、天井からたくさんのあかりが吊るされているわ。」

女性B 「(感心した様子で) 本当にたくさんあるわね。」

女性A 「いくつくらいあるのかなあ? 100個くらい?」

女性B 「もうちょっとあるんじゃない。大小、いろんなサイズがあるわね。竹ひごに和紙が貼られて、オレンジ色の光がやわらかい。」

女性A 「竹ひごもぎっしり編まれたものもあれば、ざっくりなものもあるよね。」

女性B 「形はすべて丸いけど、よく見ると、少し縦長だったり、いびつなものもある。」

女性A 「あ、あそこに小路があるよ。あかりの中を歩いてみない?」

女性B 「いいわね。(間) この近さだと大きな惑星が迫ってくるみたい。大きいあかり、小さいあかり、いろいろな高さで、ぶつからないように吊るされているんだ。」

女性A 「(少しはしゃいだ様子で) みて、あかりが揺れてる! まるでダンスを踊っているみたいね。なんだか、私もあかりの仲間入りしたみたい。」

女性B 「ゆらゆら揺れて、くすくす、こそこそ、楽しくあかりが、おしゃべりしているみたい。」

女性A 「近づいて見ると光り方もそれぞれね。明るかったり、薄暗かったり。小さい方が明るく感じるわ。」

女性B 「(しみじみと) あ~なんだか暗くなってきたわ~。あら、全部消えちゃった。また、つくのかしら?」

(間)

女性A 「良かった！じんわりと光はじめてきたね。」

女性B 「なんだか命のともしびのよう。大きさや光り方が様々だからかしら。内なる輝きを放っているみたい。」

女性A 「私には、それぞれの夢や心に灯した希望を象徴しているようにも感じるわ。」

女性B 「イサム・ノグチは、《あかり》を『光の彫刻』と考えていたそうよ。世界中をあかりで満たそうとしたんですって。」

女性A 「(感心した様子で) 彫刻って硬くて重いイメージがあったけれど、こんなに柔らかくも表現できるのね。」

女性B 「軽い素材でも、存在感があるのは、ひとつ一つの輝き方に個性があるからかしら。このあかりをみていると、なんだか励まされるなあ。私も私らしく輝きたい。」

(曲入る)

【MC③】

最後の作品は、お手元のチラシの作品番号⑤ 「発見の道」です。今回の展覧会のタイトルにもなっていますね。

じっと作品をみつめる女性が、自分の考えや想いを語ります。

【《発見の道》】

女性語り手 「展覧会場の奥に佇む《発見の道》。私は今、作品の正面に立っています。自然の石の風合いが残るこの作品に、厳しさと、同時にどこか優しさを感じています。あなたはこの作品から何を感じますか？」

「では、近づいて、じっくり見てみましょう。」

左上の表面は細かいザラザラで、岩山の滑り落ちそうな斜面のようです。そこから深くえぐられたような三日月型の窪みは、すべすべと滑らかで、石の中に入っているような安らぎを感じます。」

「次に右側に視線を移してみましょう。」

スパッと切られたような表面は自然の原石のような粗いデコボコが目立ちます。右端のてっぺんから垂直に下がる線が、丸みをおびたふくらみへと繋がる曲線へ。腰のくびれを思わせる優しいシルエットです。この部分は深く、そして丁寧に彫られ、磨かれています。光の当たり方で、彫り分けられた表面の色や線、質感のコントラストが石の表情を際立たせ、こちらに語りかけてくるようです。」

「あなたは、この作品がどのくらいの大きさだと思いますか？

実は55cmほどの高さで、手で抱えられる大きさなのです。他の石の彫刻に比べ、小さく、ボリュームのない三角柱の原石にイサム・ノグチは何を見出したのでしょうか。」

「目で見えるもの、触りながら感じるものと対話をすることで、『自然の石』と『作品』の間(ハザマ)に、石が持つ様々な可能性を感じたのではないのでしょうか。」

「一太刀（ヒトタチ）で割られたような鋭い断面、潔い直線、優しいシルエットが響き合うように配された作品に、私は『すべてを受け入れるような深い包容力』を感じました。」

「いつもこの作品をそばに置いて、時には触れたり、抱きしめたりしたくなるような愛おしさが湧いてきました。」

「あなたはどう感じるでしょうか？

ぜひ美術館に足を運び、実物をお楽しみください。

違った角度から見ると、新しい発見があるかもしれませんね。」

(曲入る)

【ED】

いかがでしたか。みなさんも、「私はこう見た！」というストーリーなどを、ご家庭やお友達同士でお話してみてくださいね。

とびラジオは、今回の番組以外にも二つご用意しています。是非そちらも聞いてみてくださいね。

イサム・ノグチ展は、東京都美術館で8月29日日曜日まで開催中です。

本日は、最後までお付き合いいただき、本当にありがとうございました。

東京都美術館でお目にかかれる時を、とびラー一同心待ちにしております！

(了)